

紫の上の最晩年——描かれない往生成否をめぐる——

日本女子大学大学院博士前期一年 林 悠子

本稿では「描かれない往生の成否」を論じようとするわけであるが、このような命題をたてたときに「往生成否」が「描かれない」ことを立証することとはもちろんのこととして、「往生成否」が描かれない代わりに何が描かれたのかを示すことが求められよう。原則的に道心と抱き合わせて語られる紫の上の最晩年（具体的には「若菜下」巻の発病から、「御法」巻でその生涯を閉じるまでの期間を想定している）について、紫の上の道心を認めつつも仏教思想や往生思想のみでは説明しつくせない作品の姿勢を考察したいと思う。もちろん私は、紫の上の道心を否定するつもりはさらさらない。しかし紫の上の仏教への傾倒以外の側面に目を向けると、紫の上の最晩年においても「教養」の問題が重大な要素として浮かび上がってくるように思われるのである。

一、描かれない臨終行儀

「描かれない往生成否」を論ずる前に、描かれない臨終行儀について考察を試みたい。臨終行儀と往生の成否は密接な関わり合いを持っていると考えらるからである。

物語作品中の主要な登場人物が、臨終時に念仏を唱えるという場面が描かれない不自然さを、今井源衛氏が指摘されている（1）。『源氏物語』が執筆された時代が、浄土教の隆盛期であったというのみならず、すでに指摘がある勸学会・二十五三昧会などの念仏結社に集った文人貴族たちと、源氏作者

の父、藤原為時の距離の近さ（2）を考えた時にも、当然問われるべき疑問であろう。紫式部と、これら念仏結社の直接的な関係をいうのは早計にすぎようが、文人貴族の浄土教への傾倒は時代の傾向であり、少なくとも彼女を取り巻く環境の一つであったことは、疑いないのである。今井氏の指摘を受けて、篠原昭二氏は、「臨終念仏がなかったことそれ自体に意味があり、物語と臨終念仏とはむしろ深いところで関係しているのではないかと推察されるところもある」とされている（3）。

『源氏物語』作中に、具体的な場面として登場人物が臨終念仏を唱えて死を迎える場面が描かれることはないのであるが、描かれないものの、臨終行儀がとられる、或いはとられた、と予測される人物として、篠原氏は横川の僧都の母尼と宇治の八宮を挙げておられる。小野の母尼の場合は、僧都の言葉として、（もちろん篠原氏が「語り手の軽い語り口の中に出てくるのみ」とされるように、重大なものとしてとらえる必要はなさそうであるが）

なにがしは、惜しむべき齢ならねど、母の旅の空にて病重きを、助けて念仏をも心乱れずせさせむと、仏を念じたてまつり思つたまへしほどに……（夢浮橋巻）

と、作中に見られる以上、この尼が臨終を迎えるときには臨終行儀がとられるであろうことを予測して間違いないだろう。宇治八宮の場合はこの尼のように臨終行儀がとられることを約束する言葉や文面は見られず、また臨終の具体的な場面描写もなされないのであるが、

阿闍梨（山寺で病んだ八宮に）つとさぶらひて、仕うまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれど、限りのたにもおはしますらん。君たちの御事、何か思し嘆くべき。人はみな御宿世といふもの異々なれば、御心にかかるべきにもおはします」と、いよいよ思し離すべきことを聞こえ知らせつつ、「いまさらにな出でたまひそ」と諫め申すなりけり。（稚本巻）

と、阿闍梨が看病人となって八宮に念仏を唱えることを勧め、臨終行儀がとられたと思われるわけである。先に述べた篠原氏の論を受けて、原岡文子氏（4）、藤原克己氏（5）が、八宮最期の描写に『往生要集』や、二十五三昧会の起請文の影響が色濃く見られることを指摘しておられる。藤原氏が述べられる通り、「八宮が住み慣れた家を出て阿闍梨の山寺で亡くなったこと、阿闍梨が八宮の臨終正念を助ける勤めを誠実に果たしたこと」において、首肯されるべき見解といえよう。八宮が寺に入るに際して、娘たちや家に対して懇ろな別れを告げたのも、山寺が阿闍梨と八宮双方に往生院の役割を果たすものとして認識されていた証左となるだろう。

八宮の最期と同様の臨終行儀が、紫の上にもとられたとは考え難い。紫の上の死に臨終行儀がとられたとする立場に、塚原明弘氏がおられるが（6）、氏が主な根拠として論じられる紫の上の臨終描写への二十五三昧会の記請文の影響は、まず考えられないであろう。塚原氏は発病後の紫の上が移された二条院が、臨終を迎えるための別院や往生院としての機能を果たしていると考えておられるが（7）、紫の上が「わが御私の殿と思す二条院」「わが御殿と思す二条院」と繰り返す二条院が、臨終の際に二愛を起こさせないために設けるという往生院と同等のものであるとは思われない。篠原氏は、臨終行儀が遂行されるためには、死に近づく者と残される者双方に、死を受け入れる覚悟が必要であることを指摘されるが（8）、光源氏が、紫の上を失うこ

とを極端なほど怖れたことは作中にも繰り返し述べられるところであり、彼の心情に沿って考えれば、紫の上は出家が許されなかったことの延長として臨終行儀も許されなかったと考えるのが妥当であろう。また、登場人物の心情はそれとして、作品の関心やプロット上の要請としても、紫の上の臨終行儀が描かれなかった理由を考えねばならないだろうが、それは紫の上の往生の成否が書かれなかったことと深く関わりそうである。次に、臨終行儀と往生思想の関連性を考察したい。

二、描かれない往生成否

文学的なリアリティーという側面から考えたとき、物の怪や怨霊がリアルな存在であるのと同様に、『往生伝』等に見られる極楽往生も、また逆に往生出来なかった場合に味わうという地獄の苦しみも、平安の文化圏の中ではある一定のリアリティーを有していたのであろう。作品の中の登場人物や、同時代の読者が極楽往生をリアルなものとして感じている以上、我々もまた極楽往生を絵空事として理解するべきではない。しかし、『極楽往生』に歴史学的な目を向けてみた時、死んだ人間が往生したとされるのは、偏に生きている者が死者の往生を信じるからに他ならない。

生者が死者の往生を認定する際に絶対条件になるのが、奇瑞であり、夢告であることは、西口順子氏が指摘されるとおりである（9）。『往生伝』中には、臨終時の描写に特に臨終行儀と思しき描写が書かれずに往生を果たした例も多く書かれるが、実際のところは臨終行儀が行われた場合の方が、臨終時の奇瑞は現れやすかったであろう。特に、奇瑞が現れるためのメカニズムは、ムラサキで託宣があるときの集団幻想状態に類似すると西口氏は指摘される。つまり、奇瑞の起きやすい装置、具体的には、阿弥陀堂や、『往生要集』や二十五三昧会の起請文に書かれる臨終行儀を整えて、看病人が病人の言葉をすべて記録することによって、「奇瑞」が発生するというのである。

確かに、臨死者が光明を見たり、音楽を聴いたり、薫香をかいだりとした記事が看病人によつて記録されることによつて、臨終時に奇瑞が見られたとされ、往生が認定される場合は多かったのだと思われる。だからこそ、院政期に入ると、病人を往生人にしようと家族ぐるみで努力する例が見られるのだろう(10)。

紫の上の晩年は道心と共に語られるにもかかわらず、彼女が死に臨むとき往生を認定する絶対条件ともなる具体的な奇瑞や夢告は描かれない。もちろん、紫の上の最期は、「最大級に美化して語られねばならなかった。」(11)とされるように、物語は、紫の上が往生できなかった可能性をみじんも臭わせないのであるが、それはそれとして、奇瑞と夢告のみが、往生の根拠とされる限り、紫の上の死に際してそれらが描かれなかったことは、もう少し注目されても良いと思う。

原岡文子氏は、在家のまま法華経供養によつて往生を果たした藤原仲遠の例を用いて、紫の上も法華経供養によつて、仲遠同様、在家のまま宗教的に救済されたとされる(12)。

越中前司藤原仲遠は、天性の催すところ、心に悪を好まず。壮なる年に及びて、常にこの念を作さく、命は薙露のごとく、身は秋の葉に似たり。消滅疑なきこと、風の中の燈のごとく、去留定まらざるること、水の上の沫に似たり。頭を剃り除きて衣を染め、跡を深山に削りて、色を避け世を通れ、心に戒律を護らむとおもへり。然れども、妻・妾側にありて、忽然として捨てがたく、子孫走り遊びて、憐愍自らに生ぜり。仍りて身は朝市に存して、王事に随ふといへども、心に厭離を生じて、永く仏法に帰せり。一寸の暇を惜みて、法華経を誦誦し、須臾の陰を観じて、弥陀仏を称念す。手に経巻を執りて、車馬に乗りて行き、口に妙法を唱へて、世路を渉る。毎日に法華経一部・理趣分・普賢の十願・尊勝陀羅尼・随求陀羅尼・弥陀の大呪等を転読して、更に間断なし。一生に読みたるところの法華経万部にして、念仏はその

正直・慈悲など、往生する女性の特性とされる性格をおおよそのところで備えているといえ、彼女の臨終時に奇瑞が書かれたり、死後、光源氏の夢に現れて往生を告げたりしても、読者に不服はなかったのではなからうか。ところが、物語は往生認定の絶対条件を書くことを避けながら、また往生しなかったとはとも思えないような静穏さをもつて、紫の上の死を描いた。紫の上の往生成否は不明であるにもかかわらず、彼女の死は穏やかで、気高いものとして語られる。彼女の死の静謐は、どのようにしてもたらされたのだろうか。少なくとも、物語は「往生」というゴールを目標として、仏道修行に励む紫の上の姿を、彼女の最後の日々として描こうとしたわけではなさそうである。紫の上に死の静謐をもたらした要因を、宗教的な側面と、そうではない側面から改めて問い直したいのである。

三、「夕霧」巻の述懐

紫の上の晩年の思索を窺わせるものとして、「夕霧」巻の述懐はよく引用される。夕霧と、落葉の宮の結婚をめぐる騒動を源氏から聞かされた紫の上の感慨である。

女ばかり、身をもてなすさまとこそせう、あはれなるべきものはない、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたむも、生したてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事、よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

数を知らず。法華講に値遇すること二千余座、造仏・写経・檀施等の善は、その数甚だ多し。最後の臨終に、病み患へども心を乱さずして、起居また軽利なり。口に妙法を誦し、心に仏法を信ぜり。奇しき香鼻に薫し、妙なる音、耳に聞こゆれば、与に語りて言はく、ただ今当に兜率天に生るべしといへり。合掌して即世せり。

『大日本国法華経験記』巻下第百四

仲遠の例は、氏が指摘されるとおり法華経供養が共通するほかに、「憐愍」が紫の上の源氏に対する「あはれ」の情を思わせる点でも、共通点が見られるといえる。しかし繰り返し述べてきているように、往生と判断される絶対条件が、奇瑞であり、夢告である以上、紫の上が仲遠と同様の功德を積んだからといって、仲遠と同様に往生がかなったと読むのは、早計ではないだろうか。往生が修行の度合いにはよらないことは、当時の人々に認知されていたようで、西口順子氏は「拾遺往生伝」に収められた、大法師頼遠の例を挙げてその苦悩を論じておられる(13)。頼遠は、毎月十五日に往生講を催し、熱心に往生のための修行に励んだが、「已に死期に臨みて、涙を垂れて曰はく、天に音楽なく、室に薫香なし。往生の願は、本意相違せりといへり。かくのごとく声を挙げて、再三嗟嘆す。忽ちに三尺の阿弥陀仏を抱き奉りて、居ながらにして入滅せり。」(14)という壮絶な最期を遂げたのだという。頼遠の死後に奇瑞が現れたとして、彼は往生人の列に連なることとなるわけであるが、それが往生を信じられずに死んでいった者にとつて、どれほどの慰めになるだろう。我々は、『往生伝』という、往生がかなった人々の列伝を読むために、時に忘れがちであるが、『往生伝』の陰には数多の往生できなかった人々がいたことを、忘れてはならないだろう。西口氏の述べられるとおり、往生できるのはごく一握りの人々なのである。

しかし、紫の上は史実に存在する人物ではない。彼女を往生させようとする者が思えば、臨終時に奇瑞を書くことは容易なことである。紫の上は、柔和・

丸山キヨ子氏は、この述懐が客観的であり、論理的であること、「無言太子」の引用が男性的であること、紫の上が女一宮を思つて述懐が終わるのであることは、源氏との疎隔が大きすぎるなどから、この述懐が源氏のものだとしておられる(15)。この見解は、首肯出来るようにも思われるが、このような女性の立場を悲しみ憤慨する主張が、源氏と紫の上どちらにより必然性があり、切実であるかを鑑みたとき、やはり従来通り紫の上の述懐として解釈したい。紫の上と落葉の宮には、「教養の挫折」という共通のテーマが読めると考えるからである。

落葉の宮は、女二宮をあきらめられない柏木のもとへ降嫁するものの、「下臈の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはいこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ、慰めがたき嫉妬にて、人目に咎めらるるまじきばかりもてななきこえたまへり。」(若菜下巻)という扱いを受けている。柏木の心が女三宮にあるために形だけ北の方として扱われる、というのではなく、「下臈の更衣腹におはしましければ」と、母の出自の低さが、柏木をして賜った宮を軽んじさせていることが書かれるのは、注目されてよい。柏木にとつては、「皇女との結婚は社会的優位を保証するものとして価値づけられている。」(16)とされているとおり、より重んぜられている皇女をこそ、我がものとしたいのだろう。そのような価値観を持つ夫の前で、母御息所が「院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども試みきこえたまひしにも、かやうの方はおぼめかしからずものしたまふとなむ定めきこえたまふめりしぞ」と自慢する(横笛巻、琴を弾きならしたところで、せいぜい不満の表明をしたに留まり、「さすがにあてになまめかしけれど、同じくは、いま一際及ばざりける宿世よと、なほおぼゆ。」(若菜下巻)と、逆に三宮思慕を深めさせることになるだけなのだ。ここで、柏木得意の笛と合奏することにでもなれば、落葉の宮の琴の腕前も、それなりの価値を持ち得るが、合奏するどころか、琴の音を聞いた柏木が、手に入れられなかった三宮を思

い、自らの宿世のほどを嘆くのであれば、かえって夫婦間の隔絶を表出しているともいえる。

柏木の死後、夕霧は落葉の宮が住む一条宮を訪れる。落葉の宮と母御息所が、趣味良く暮らしている様が描かれ、夕霧はその「あてに気高くすみなしたまひて」(横笛巻)と評される宮邸と、雲井雁と暮らす三条邸を比べてみたりもしている。その後、御息所の病氣加持のために、母娘共々移った小野の山荘も、山里の風景の珍しさもあいつて、夕霧が宮に懸想する場面として、筆を尽くして描かれる。

風いと心細う更けゆく夜のけしき、虫の音も、鹿のなく音も、滝の音も、ひとつに乱れて艶なるほどなれば、ただありのあはつけ人だに寝覚めしぬべき空のけしきを、格子もさながら、入り方の月の山の端近きほど、とどめがたうものあはれなり。(夕霧巻)

風雅に描かれる一条宮や小野の山荘は、もちろん恋の描かれる場面の常套手段として夕霧の恋情を誘い、高めるための装置なのではあるが、落葉の宮方の教養として考えたときに、教養が高かろうと、内親王という高貴な身分に生まれようと、経済力と後見がなければどうにもならぬという状況を映しているように思われる。

落葉の宮の母御息所は、誇り高く風雅な人物として造形されており、娘の結婚に関しても皇女という身分柄から反対していたことが繰り返して語られる。しかしその出自が低かったであろうことは、御息所死後一族の代表として現れるのが、甥の大和守であることから推察される。落葉の宮の父、朱雀院は女三宮を偏愛し、出家の際の財産分与も由緒あるものはすべて女三宮に譲り、他の皇子皇女にはその残りを分配したというのであるから、父院からの経済的な援助は期待できなかったのだろうし、皇女の後見として、大和守では不足であつたらう。落葉の宮は母の死後、両親につながる後ろ盾を失うことになる。とはいえ、父院の意向は、たとえ経済的な援助をしてくれない

知る人になるよう姫君を教育する、ということとは、具体的には姫君の教養を磨くことだといえる。教養を高めることの無意味さは、紫の上自身が痛感してきたテーマであつたことを考えると、この述懐は落葉の宮へ切実な共感からなされたものと思われる。しかし、一方で秋山虔氏が「この紫上の思念は、特定の女三宮の身の上についての感慨とのみ解することは許されない」(18)とされるように、この述懐は女性一般の悲しみが述べられているとも言われる。発病直前の紫の上は、自らの人生を振り返って、「あぢきなくもあるかな」と心中に思うのだが(若菜下巻)、同様の体験を生きたならばぬ女性たちの人生に思いをいたすようになるのには、発病にともなう六条院の妻妾争いからの離脱が関わってくるように思う。

四、六条院から二条院へ

前節の最後に、紫の上の、自身の人生への不満が、女性一般の宿命への感慨へと発展したことを述べた。物語はまた、源氏への不満・不信、そして将来への不信から出家を願っていた紫の上が、発病後は出家の望みは変わらぬものの、源氏の悲しみを心苦しく思つて生きようとする姿を描く。これらの変化は、発病後に紫の上が六条院から二条院に移り、六条院を舞台とする妻妾争いから離脱したことが大きな要因として挙げられるのではないかとと思う。それは、発病した時点で紫の上は教養の力を持つて、対世間的なプライドを保持することに挫折したといえるからである。死が近いことを自覚している紫の上は、現世での将来を誇り高く生きることには心を砕く必要はない。六条院における自己の存在価値を見いだせない紫の上(19)にとって、六条院の内と外の煩わしい人間関係(それは、紫の上にとっては、プライドを賭けて教養を他と競うことでもあるのだが)から逃れる方法は、出家が許されない以上、死以外あり得なかつた。そうして、紫の上がその才覚によって、自身に有利な状況を作り出す努力を諦めたときに、彼女の他者を見つめる視線も変化していったのであろう。さらに紫の上の発病は、源氏や明石女御に

にせよ無視するわけにもいかず、落葉の宮は出家することかなわない。出家を諫める朱雀院の「げに、あまたとさまかうぎまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど、後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましきとき、この世、後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。」という言葉(夕霧巻)も、自分に恥をかかせるなというのが院の真意であるとはいえ、後見のない宮が、夕霧に屈するほかない状況を良く表している。

落葉の宮の教養の高さは、夕霧との関係において、むしろ宮にとって不本意な状況を作り出すように働いている。源氏に、「かの想夫恋の心ばへは、げにいにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆるよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるることどもこそ多かれ。」(横笛巻)と評される想夫恋にしても、中川正美氏が述べられるとおり、落葉の宮にとつては夫を追慕する自然な行為であつたのだが、夕霧にとつては恋情を誘われる結果となり、琴の音の意味が夕霧により意図的に転換されてしまっているのである(17)。さらに、この出来事は夕霧の口を通して源氏に伝えられ、先に引用した批判的な見解を招くことになるのである。

再び、冒頭に掲げた述懐に戻りたい。夕霧巻の紫の上が、夕霧と宮との関係の内実をどれくらい知っていたかは定かでない。夕霧がそのように取り繕ったため、宮が不承知なまま関係が進んでいることを、世間は知らなかつたとされている(夕霧巻)。ここではとりあえず、落葉の宮が結果として亡き夫の妹婿と関係することになり、そのために致仕大臣家との関係が悪化し、世間もそれを取り沙汰しているという状況への紫の上の同情を読むに留めたい。そこには、教養高い女性が後見を失ったとき、その教養では何も為し得ないどころか、「もののあはれ、をりをかしきこと」を知ることが、かえって男の恋情を掻きたて、女は世人の批判にさらされ翻弄される他ないことへの、憤りと諦観があるのだろう。「もののあはれ、をりをかしきこと」を

とつて、紫の上が重要な存在を占めていることを表出することになる。朝廷への配慮から女三宮を尊重せざるをえなかつた源氏も、紫の上が発病するやいなや、付き切りの看病をするし、女御もその身分の制約の困難さにもかかわらず、見舞いに訪れる。ここに来て、紫の上は病むことによつて教養による関係維持がかなわなかつた源氏と、養育はしたものの血の隔絶を感じさせられた(20)明石女御を病床に留めようのである。自らの才覚によつて自己の存在価値を見出そうと努力を重ねた紫の上が、その努力の果てに発病して、かえつて源氏と明石女御の並々ならぬ思いを知ることになるのは、皮肉というより他にない。もつとも、回復しない紫の上の状況に、夕霧は「この人亡せたまはば、院もかならず世を背く御本意遂げたまひてむ……」(若菜下)と思うように、客観的に見ても源氏にとつての紫の上の存在の重さは明らかなのであり、それはこの夕霧の述懐が、三宮がまだ在家の時点でなされることによつても理解されよう。しかし、あくまで六条院内での主体的な自己の在り方を模索する紫の上にとつて、女三宮の降嫁は源氏との間に絶対的な隔絶をもたらすこととなつたし、源氏の妻という立場以外の有りようを紫の上が見望することは不可能であつた。紫の上が主体的であることを諦めたとき、彼女は、初めて源氏のともすれば独りよがりな愛情の存在を確認し、受容するのであろう。篠原氏は、

紫の上なしには生きられない光源氏と、光源氏への慈愛ゆえに生きようとする紫の上と、もとより無常の世の本質的な孤独を超越したとはいえずとも、ここには深く結ばれた夫婦の情愛の姿があり、これ以上のもを人の世に求めるのは不可能とさえ思われる。

と述べられる(21)。これは、一面真実であるのだが、紫の上が自らの才覚・教養によつて自尊心を保持することを諦めたことによつて、成立した夫婦関係だともいえるのではないだろうか。

五、道心の在り方

紫の上の教養は、身分や子供の存在など彼女の力が及ばない論理の働く六条院においては無力であつたものの、人間相互の関係を結ぶ媒介として、紫の上と周辺の人々にそれなりに豊かな関係を育んでいた。その最たる例が光源氏との関係であることは言うまでもない。紫の上の出家を源氏が阻むのも両者の高い教養によつて育まれた関係性が強固であることの結果であらう。見てきたとおり、紫の上発病後の二人の関係性は必ずしも源氏の一方通行ではなく、紫の上も源氏のために生きようとするのである。死が近い御法巻では、

この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆にまじらぬ御身なれば、あながちにかけとめまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける。

という紫の上の感慨が語られる。池田和臣氏は、「この知と情のもつれは矛盾ではないが、光源氏という男と結ぶ他生きの道なく、一方それゆえに憂いをいだかねばならなかった紫の上の人生のあり方をそのまま照らし出す矛盾でもある。」(22)とされる。この「あはれ」は、やはり仏教理念と相克する性質のものであり(23)、源氏と共に生きてきた紫の上にとつて、絆を断つといつてもこの程度が限界なのであらう。

出家をしなければ往生がおぼつかない、という考えは、当時一般に認知されていたらしい(24)。しかし、紫の上の出家は、発病以前にせよ以後にせよ実現するはずもない。光源氏が許さないという第一の理由があるわけだが、紫の上側にも理由があつたのではないだろうか。発病前に出家を敢行すれば、『蜻蛉日記』の鳴滝籠りや、雨夜の品定めに登場する女のようになり

何ぞ相送らるといふ。また男女に語りて云はく、我汝等を生み育て、多く罪業を作り、多くの身を掻き分ちて人と成らしめつ。何ぞ今早已にて他の境に移り去るに、一人も相副はざるや。年来所持せる法華経六万九千三百余字、諸仏各光明を放ち、無量の菩薩各燈炬を捧げて、前後を圍繞し、極楽に将て去るといへり。かくのごとく語り了りて、即ち読経礼仏して入滅せり。然るに、その死屍は数日を経たりといへども、その氣極めて香しくして、沈檀等のごとし。夫子眷属、遠近親疎、皆道心を発して、法華経を読みたり。

『大日本法華経験記』巻下第百廿二

紫の上に、出家を許す場合は、源氏も同時に出家するつもりでいるため、紫の上は、女三宮のように六条院内において修行に励むことは想定されていない。その点、この「奈良の京の女」のように出家しながら臨終時に家族と面会することはなさそうであるが、そうでなくても紫の上が、まさか死に瀕して、「夫も子も頼りにならず、写経した法華経のみが頼りである」などという無神経な言葉を言うとも思われない。紫の上の願いは、あるいは女三宮のように、源氏と同居しながらほどの修行をすることだったのかもしれないが、源氏の愛執の深さを考えると、あるまじき過ちが起らないといえず、かえつて想定されにくいといえよう。少なくとも、御法巻冒頭で語られる源氏の出家観は、人との関わりを絶つ厳しい修行を前提としており、その極端さゆえに、紫の上によつて敢行されることではないのである。また、張龍妹氏の述べられるとおり、自分の死後の源氏を心配する紫の上は出家をした場合も同様の感情から逃れられないはずであり、それは源氏への慈愛に満ちた同情とはいへ、仏教からすれば、執着に他ならない(28)。このように見てくると、出家がなされない理由には、源氏の強い制止の他に、紫の上自身の理由もあるように思われる。

出家が出来ないまま死期がいよいよ近づいた紫の上は、自分の後生のため

かねない。出家の希望を口にすることは、妻からの遠回しな離婚請求とも言われ(25)、出家後は、家政も放棄するのが通例であつたようである(26)から、社会的身分の重い紫の上が出家した場合、波紋は六条院内に留まらず、人々の語りぐさになりかねない。「なりふり構わぬ出家願望が、自ら敗北を認める結果になるのを惧れ」る(27)と言われるところである。

一方、発病後、死に瀕した紫の上が往生できないことを畏れて出家するのは納得できるようにも思われる。しかし、往生のための修行は極端なまでに人との関わりを断たせる。以下に挙げるのは、極端な例ではあるが、発心した「奈良の京の女某氏」が夫子との縁を切り往生する話である。

奈良の京に一人の女人あり。姓名いまだ詳ならず。性を稟くること柔軟にして、形貌端正なり。夫婦の礼に随ひて、数子を産生めり。過半の齢致りて、自ら道心を発し、法華経一部を書写して、所持の経となせり。一部を読み習ひて、行住坐臥、偏にこの経を誦して、語黙造次、ただ妙法を持して、更に世路を営まず。蚕養織婦、永くその業を捨て、裁縫染色、更にその営を忘る。飲食衣服の家の所作、乃至、田畠農業のこと、悉くに皆知らず。ただ一心に合掌して、法華経を誦誦す。その夫、尋常に云はく、世路を経る人は、経営に暇なく、世間を送り過す。何人か徒然として、自身を知らず、夫の作法を知らず、子の有様を知らずして、ただ経巻を執りて、年月を送ることあらむや。先づ世間の要事を作してより以後、その隙に時々経を読み仏に仕ふ。これを例のこととすべしといへり。かくのごとく常途に、これを教へ道ふといへども、更に聞き入れずして、弥世のことを知らずして、偏に他の人を雇ひて、家のことを営ましめたり。かくのごとく万のことを忘れて、直に経を誦誦すること廿余年なり。

最後の時臻りて、数日の悩病平癒し畢へぬ。身体を沐浴し、新しき淨衣を着て、手に経巻を執り、夫に向ひて語りて云はく、数十余年、夫妻の契ありといへども、今日この界を去りて、他の世界に趣き行く。

の法華経千部供養会を営む。鈴木日出男氏が述べられるとおり、この法会で「行く方知られず」と往生・救済に確信がもてない紫の上は、その心細さを解消するために、積極的に人と関わりようとする(29)。「仏のおはする所のありさま遠からず思ひやられて」と評される法会の中で、彼女は宗教的な救済を願うよりも、法会を共有する人間たちによつて、不安を解消しようとするのである。紫の上の道心を否定するつもりはないが、この法会は紫の上が教養の高さによつて育んだ、現実世界での人間関係の集大成とも読めないだろうか。法会そのものもさることながら、そこに集った人間たちとの交流も、紫の上にとっては意義深いのである。紫の上へ、天皇をはじめとして、東宮、秋好中宮、明石女御、夕霧など、当時の社会において最も有力な人々から厚志があり、花散里、明石御方も援助をしている。特に、明石御方、花散里へ紫の上の側から歌を贈っていることは注目されよう。「まして、夏冬の時につけたる遊び戯れにも、なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすれど、さすがに情をかはしたまふ方々は……」という述懐は、些細な事を競つたが、結果として、教養・文化的活動を通じた交流をしたことになった源氏の他の妻妾たちとの関係を客観的に把握している。

紫の上は、その後自ら歌を詠みかけ、源氏と明石中宮と唱和をして、死を迎える。死の直前まで人と関わったことの意味は大きいだろう。往生の成否は不明であるが、その死はかぐや姫の昇天に重ね合わせられ(30)、清浄極まりないものとして語られる。そこには、『竹取物語』に通じる、現世の人間関係を肯定していく姿勢が読めるのではなからうか。

紫の上が往生願生者であつたことは、物語から十分読み取れると思う。しかし、物語は彼女が往生するための道程を書いたのでは決してない。紫の上の最晩年は、道心の深まりと同時に、しかしこの世ならぬ世界を無心に希求することはできない紫の上の葛藤が語られているといえよう。それは、煩わしくも、捨てがたい、紫の上自身が築き上げたこの世の人間関係ではなかつただろうか。そしてその人間関係こそ、血族の庇護を受けられず、教養すら

も源氏によって与えられた紫の上にとつて唯一、源氏の力によらず、自らの教養と才覚によつて獲得したものであつたように思われる。

注

本文は『新編日本古典文学全集』により『源氏物語大成』を参照した。

- 1 今井源衛氏 「源氏物語概説」 『岩波講座 日本文学史』 一九五八
- 2 丸山キヨ子氏 「源氏物語と『往生要集』との関係」 『源氏物語の仏教』創文社 一九八五
- 3 篠原昭氏 「臨終行儀と『源氏物語』―逝く者と見取る者と―」『国語と国文学』一九九〇・一一
- 4 原岡文子氏 「宇治の阿闍梨と八の宮」『源氏物語 両義の糸』有精堂 一九九一
- 5 藤原克己氏 「源氏物語と浄土教―宇治の八宮の死と臨終行儀をめぐって―」『国語と国文学』一九九・九
- 6 塚原明弘氏 「紫の上の死と葬送の表現」『中世文学』一九九四・五「御法巻と二十五三昧卒―紫の上の死と葬送の表現―」一九九四・八「死を見つめる心―御法巻の紫の上―」『国学院雑誌』一九九五・一「紫の上の二つの死―『源氏物語』と往生思想―叢書想像する平安文学』勉誠出版 二〇〇一
- 7 塚原氏、注3前掲論文 「御法巻と二十五三昧卒―紫の上の死と葬送の表現―」一九九四・八
- 8 篠原氏、注3前掲論文
- 9 西口順子氏 「浄土願生者の苦悩―往生伝の奇瑞・夢告―」伊藤唯真編『民衆宗教叢書 第十一巻 阿弥陀信仰』雄山閣 一九八四
- 10 小原仁氏 「女人往生者の誕生」『中右記』の女性をめぐって 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教3 信心と供養』平凡社 一九八九
- 11 秋山虔氏 「源氏物語」岩波新書 一九六八
- 12 原岡文子氏 「紫の上への視角 片々」『源氏物語 両義の糸』有精堂 一九九一
- 13 西口氏、注9前掲論文

- 14 『拾遺往生伝』第八 大法師頼通
- 15 丸山キヨ子氏 「紫の上を考える」『源氏物語の仏教』創文社 一九八五
- 16 後藤祥子氏 「皇女の結婚―落葉宮の場―」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 一九八六

- 17 中川正美氏 「源氏物語と音楽」和泉書院 一九九一
- 18 秋山氏、注11前掲書
- 19・20 後藤祥子氏 「若菜」以後の紫の上」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 一九八六
- 21 篠原氏、注3前掲論文
- 22 池田和臣氏 「紫の上終焉の筆致―御法の巻の表現構造―」『むらさき』一九七五・六
- 23 高田祐彦氏 「あはれ」の相関関係をめぐって―『古今』『竹取』から『源氏』へ―『国語と国文学』一九九六・一一
- 24 勝浦令子氏 「女の信心―妻が出家した時代―」平凡社 一九九五
- 25 工藤重矩氏 「若菜巻以降の紫上の妻としての立場」今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院 一九八九、勝浦氏、注24前掲書
- 26 勝浦氏、注24前掲書
- 27 後藤氏、注19前掲論文
- 28 張龍妹氏 「紫の上の道心」『源氏物語の救済』風間書房 二〇〇〇
- 29 鈴木日出男氏 「紫上の絶望―『御法』巻の方法―」『文学・語学』一九六八・九
- 30 河添房江氏 「源氏物語の内なる竹取物語」『源氏物語の喩と主権』有精堂 一九九二